

農地を守り次世代へ豊かさをむすぶ（掛川市）

R7.7.10訪問



お名前	農園むすび 松浦 直矢さん
就農した時期	2022年1月（就農4年目）
栽培品目・面積	米 7.5ha、いちご30a（令和7年度）
販路	米： 直販、米穀小売店、飲食店 いちご：JA出荷、JA直売所
働き手	本人・妻・従業員2名（いちご収穫期+5名）



（写真：ご本人提供）

■ 就農したきっかけ

祖父母が農業を営んでいたもので、幼少期から農業に触れる機会がありました。実家を離れ一人暮らしの大学生活中、祖父が引退する直前に作ったお米のおいしさに感動し、地元での就農を目指すことにしました。大学の先輩の紹介で県外の農業NPOに勤めた後、掛川市に帰郷し、就農準備を始めました。地元のいちご農家でのアルバイトや、水稻の勉強会への参加を通して、全国各地の生産者や米穀店主と知り合い、多くを学び就農プランを練りました。

■ 活用した支援策等

行政への就農相談の後、水稻との複合経営の作物としていちごを選択しました。県の新規就農支援事業を利用し、受入農家の下で1年間の栽培研修を受けました。資金面では、「農業次世代人材投資事業」の「準備型」「経営開始型」及び日本政策金融公庫の「青年等就農資金」を活用しました。

■ 栽培方法

初年度は水稻47a、いちご20aの農地で栽培を開始しました。いちごの収穫が5月末まで続くため、水稻は早生から晩生までの7品種を選択し、作業の分散を図っています。慣行栽培も行っていますが、農薬を使用しない栽培を中心に取り組んでいます。今後は担い手の少ない地元農地と、次の世代をむすぶため、規模拡大を目指します。

■ 新規就農を目指す人に伝えたいこと

希望作物が自身の適性に合うかを確かめるため、アルバイトなどで体験してみると良いです。多くの人の話を聞き、イメージを膨らませるのも良いです。まずは安定した栽培が一番大切だと思いますが、様々な販売先や販売方法についても検討しておく、自分なりの農業を見つけることにもつながるのではと思います。